

教員の行う相談活動

飯野晴美

I. はじめに

9月1日から、多くの学校で新学期が始まる。長い休み明けには、登校に戸惑いや抵抗を覚える子どもたちがいる。時には、自ら生命の営みを絶つケースさえある。今年は、登校に拒否感を抱く子どもたちへの対応を取りあげた情報番組や記事が目についた。

学校において、このような子どもたちへの対応は教育相談の範疇で行われるケースが多い。教育相談とは何のためにあり、どのように進められるべきか。本論では、教育相談に関して、教員をめざす学生が習得すべき事項と取り組む課題について検討していく。

II. 教育相談とは

1. 教育相談のイメージ

教職課程を履修している学生は、教育相談についてどのようなイメージを抱いているのだろうか。「ここに深刻な悩みを抱えていたり、問題行動がある生徒を対象におこなわれる活動」や「スクールカウンセラーが担う活動」というイメージが強い。次に、「相談」という言葉から「進路相談」を思い浮かべる学生が多くいる。さらに「進路相談」から「三者面談」が連想されるようである。ここから、教員も相談活動を担っており、自分自身も経験していること、また、

教員の行う相談活動

相談の対象が生徒だけではなく保護者もあてはまることに気がつく。

学校における相談活動は、スクールカウンセラーや特別な教員が、一部の生徒を対象に行うことではない。また、悩みや問題行動の解決だけが目的ではなく、その予防をはじめ生徒の自己理解や人格形成の手助けも図るものである。“相談活動は、すべての教員が、学校生活のあらゆる場面において、すべての生徒を対象におこなうことである。”という認識を、学生に定着させる。そして、教員になるためには、相談活動に関する知識と方法を学ぶ必要があることを理解させる。

2. 教員の行う相談活動

今日では、ほとんどの学校にスクールカウンセラーが配置されている。相談活動を専門業務とするスクールカウンセラーと教員が行う相談活動では、どのようなちがいがあるのであろう。

両者において最も違う点は、相談活動に関する臨床心理学やカウンセリングについて専門的な知識を学んだり、トレーニングを受ける機会である。したがって、教員に求められている相談活動は、スクールカウンセラーなどの専門家と同じレベルが求められているのではないということがわかる。

第2の違いは、生徒や保護者との関係である。一般に、相談活動は学級担任や教科担当、部活動の顧問など、日常の学校生活において生徒と直接的な関わりをもつ教員が担当する。相談活動に入る前に、生徒や保護者とは面識があり、大まかな人物像が形成されている。すでに生徒や保護者との間にラポールがついていたたり、日頃の様子や特徴、その変化を把握できていたりすることもある。相談をするものと受けるものが初めて出会い、お互いに相手の人となりを理解し、信頼関係を築きながら相談活動を進めていくのに比べると、教員が行う相談活動は速やかに進められる可能性が高い。一方、相談活動が終了しても、教員対生徒・保護者という関係は、一定期間保たれる。つまり、相談をしている

教員の行う相談活動

ときだけの関係ではない。また、教員は学業成績について評価をする立場である。このため、生徒や保護者がマイナスの評価につながることを危惧し、本心を語りにくいこともある。

第3には、相談活動に費やせる時間である。教員の場合は、授業や部活動の指導、校務等を担いながら相談活動をおこなう。したがって、相談を主たる業務とするスクールカウンセラーに比べて、相談活動に費やせる時間はかなり制限される。ひとりの生徒に長い時間にわたって相談活動を継続して行うことは、教員にかなりの負担を強いることになる。

最後にあげる点は、相談活動を始める契機に関することである。教員がおこなう相談活動では、自主来談による相談活動より、チャンス相談や呼び出し相談、定期面接など教員が必要を感じて始めるものが多い。教員は、相談活動の機会を設定しやすいと同時に、その必要性を的確に捉える力も要請される。

Ⅲ. 教員が相談活動を行うために必要なもの

スクールカウンセラーのような相談活動に専門的な教育やトレーニングを受けていない教員が、相談活動を担うためには、基本的にどのようなスキルや能力が備わっている必要があるのだろうか。

1. 社会人としての常識と判断力

相談活動をとおして、好ましい対人関係を築いたり、集団の中で適応的な生活を送る力を生徒が身につけられるように、バックアップするためには、教員自身がこれらの力を体得している必要がある。ひとりの社会人として、大人として、身につけているべき社会的常識や一般教養である。

集団生活を適応的に送るためには、制定されている法やルールを遵守するだけでは不十分で、明文化されていない社会的な常識や慣習などを理解している

教員の行う相談活動

必要がある。生徒の行動や相談内容について、教員がアドバイスしたり判断したりするときには、その基準となるものを身につけていなければならない。そのためには、一定の教育を受け、さまざまな経験をすることが必要である。教員免許状を取得するための基本条件が「学士の学位を有すること（4年制大学卒業）」となっている所以でもあろう。だが、現代において、大学卒業時までにこれらを十分に身につけることは、難しいともいえる。学校生活が学業成績中心であること、学校生活はそのほとんどが同年齢集団で営まれていること、家庭におけるしつけ機能が低下していること、価値観の多様化により「〇〇であるべき」「〇〇すべき」などの統一された行動や思考が薄らいできたこと、きょうだい数の減少により、子ども社会を幼少時から体験する機会が減少したこと、進学率の上昇により「教えられる」ことが当たり前になり、みずから学ぶ——身につけよう——とする姿勢が薄らいでいること、少子化になりひとりの子どもに多くの大人の手がかけられるようになったこと、進学率の上昇と少子化により大学進学に必要な学力が身につけていないものも大学入学が可能になっていることなど、多岐にわたる原因が考えられる。

生徒の行動や考え方に偏りがあったり、社会生活を送るうえで支障が予想されるかを判断するには、「どうあるべきか」の基準がなければならない。価値観が多様化し、個人の自由意志や考え方が尊重されるようになったとはいえ、何をして、どのような価値観をもっていてもいいというわけではない。自分の思いを推し進めようとするれば、軋轢を生む可能性があることを教えることも、教員の役目である。必要な力や術を身につけていなければ、将来困難に遭遇する可能性が高いことも示唆する必要がある。バックアップするということは、生徒の提案をすべてそのまま受け入れ、是認することではない。

2. 対人関係スキル

家族関係、友人関係、親戚関係、隣近所との人間関係、仕事上での付き合い

教員の行う相談活動

など、大人であればさまざまな状況において円滑な対人関係を築くことが求められる。これらに必要とされる対人関係スキルがあれば、生徒や保護者、同僚の教員とも対人関係を築くことができる。

対人関係スキルは、生徒と関係性を築くためだけでなく、生徒の日頃の様子から、その人となりを理解する際にも生かされる。また、生徒の言わんとすることを、正しく理解すること。言語的な理解だけでは不十分で、非言語的コミュニケーションに長けていること。さらに、発信する力も備えていること。生徒に対して、必要な提案、時には厳しい指摘も行う必要がある。生徒が納得するように、いかに話すか。論ずように話せるかである。

教員の仕事は、「生徒」を知ることが第一歩である。教科指導においても、「生徒」が何をどこまで理解しているかを把握することは必要である。生徒の理解力、語彙力、書く力、その速さ、話を聞く力、忍耐力、注意力などのレベルがわかっていないと、授業は、計画どおりには進まずに、失敗に終わる。

生徒指導においても、生徒を理解していることが前提となる。日常生活において、「生徒がわかって、実行しようとしている」ことをくどくどと注意しては、むしろ生徒のやる気を損ねてしまう。反対に、「この程度のことは、言わなくても生徒は理解しているはず」と教員が思っていることを、生徒は全く気づかずにいることもある。必要なことを、タイミングよく、生徒が「なるほど」と思うような諸注意が望ましい。

「相談活動」においても、深刻な問題に発展しないうちに解決できるように対応するのが最も理想的である。周りから見ると、相談活動に力を入れていないように見える。相談活動らしい相談活動をほとんどしていない。しかし、生徒を十分に理解している。ちょっとした変化に気づき、生徒に接する。少しのやり取りによって、生徒のつまずきや直面している問題を把握し、その解決に的確なヒントをだし、アドバイスをする。これも立派な相談活動である。むしろ、このような対応こそが、教員のおこなう相談活動の理想像ではないだろうか。

スクールカウンセラーでは、生徒を理解し、生徒の日常行動を見守る機会も限られる。その変化に気づくチャンスも少ない。だから、問題が大きく、深刻になって初めて相談活動が始まることになる。

Ⅳ. 相談活動の基本について

教員がおこなう相談活動の基本について、検討する。

1. 傾聴と共感的理解

「相手の話をしっかりと聞くこと」は、相談活動に限らず、対人関係の基本といえる。適当に話を聞いていては、話している相手に失礼になる。話をしっかりと聞き、理解することである。これは簡単そうにみえて、意外と難しい。「明日はお弁当だよ、て言った。」「そんなこと聞いていないよ。」このようなやりとりは、どこの家庭においても生じているのではないだろうか。上の空で聞いていたり、聞いたとしても認識できていなかったりする。相手の話をしっかりと聞いていないことを経験しているにも関わらず、それを明確に認識していないのが現状である。

さらに、スマートフォンなどの通信機器の登場によって、「相手の話をしっかりと聞く」機会はますます減少している。極端なケースでは、対面での会話ができず、通信機器ごしにしかできないこともある。

理解するとは、相手の言わんとすることを受け止めることである。だから、単に言葉として発せられたものを、字面の意味だけで理解するのでは不十分である。行間を読み取ることはもちろん、表情、間の取り方、視線の向き、言葉の抑揚、感情などを総合して、理解することが求められる。共感的理解することが望ましいとされるが、特別なトレーニングを受けずに、共感的理解がいつでもできる人は稀である。共感的理解はできなくとも、相手の言おうとしてい

教員の行う相談活動

ることをできるだけ受け止めようとする姿勢はほしい。日頃の様子や言葉から推し量られることをすべて使い、時には、質問しながら、理解するのである。質問によって、生徒自身がそれまで気づかなかった問題の一面に気づくことがある。頷き、相づち、表情や仕草によって納得したこと、理解できたことを相手に伝えることも大切である。

2. 受 容

受容するということの第一歩は、相手の話を聞く姿勢があることであり、それを相手に伝えることである。生徒が話したい、訴えたいことがあるという状況を受け止めることが大切である。授業や校務などさまざまな業務を担っている教員にとっては、受容する姿勢はあっても、それに十分費やせる時間の確保が難しい時もある。

まずは、話を聞いてみることである。無条件の受容というが、これは相手をひとりの人間として認めるということにつながる。生徒の言うことが、訴える内容がすべて正しいと肯定することではないと思う。特に、中・高校生の場合は、発達の途上であるがゆえに、考え方や判断基準が未熟であり、偏りが見られることもある。身勝手な主張や言い分をすべて「正しい」と肯定するのであれば、教員が相談を受ける意味がない。

3. いろいろな相談活動

学校における相談活動とは、やさしく、生徒の話を否定することなく聞くこと。このようなイメージを抱いている学生が、圧倒的に多い。我が国においては、教育相談（カウンセリング）は来談者中心療法を基本と考える向きが強い。しかし、臨床心理学やカウンセリングの理論は、来談者中心療法だけではない。この事実を、学生に理解させることが必要である。「グロリアと三人のセラピスト」のビデオを教材として用いて、同じ対象者の相談内容に対してもさまざま

教員の行う相談活動

なアプローチがあることを示す。このビデオを視聴して、ほとんどの受講生が、相談方法にはさまざまな方法があること、その方法の違いによって相談の効果も異なること、人によって好ましいと感じる方法は十人十色であること、を理解する。だから、教員が行う相談活動も唯一決まった方法があるのではなく、生徒によってアプローチを変える必要があることに気づかせる

V. カウンセリング・マインドについて

相談活動を担当するものの姿勢や心がまえとして、カウンセリングマインドがあげられる。カウンセリングマインドの具体的な内容は確固としたものではなく、研究者によって多少の違いが見られる。「学校教育における教育相談の考え方・進め方」に、カウンセリングマインドという言葉には、次の内容を含んでいると記されている。

- ① 単なる技法を越えた人間としての在り方を問題にしていること
- ② 理解し、理解される教師と生徒との人間関係をつくることを大切にすること
- ③ 生徒の自主性・自発性・自己決定力を尊重し、これらを伸ばすための援助としての姿勢を大切にすること

人間の在り方とは、その人の人生観であり、価値観であり、生き方そのものである。豊富な知識をもち、高い学力があったとしても、尊敬できるような生き方をしていない人もいる。知性に基づく教育と、心情に訴える教育との違いである。こころの教育と呼ばれる領域の課題である。

たとえば、「いじめはやってはいけないことである。悪いことである。」と理性的に理解することは易しい。しかし、心情的にどのように理解するかは別の問題である。もし、理性的に教えられたことが、速やかに心情的理解になっていたとすれば、とうの昔に学校においていじめはなくなっているだろう。未だ

教員の行う相談活動

にいじめによって不登校や自殺が生じる不幸な事例があるのが現実である。それどころか、大人の世界においてもいじめが生じるようになった。この事実は、こころの教育の難しさを如実に物語っている。

生徒に身につけてほしい、こころから理解してほしいと期待することは、教員自身が己の人生観として持ち合わせていることである。本音とは裏腹な口先だけの説法では、生徒のこころに響く教育は無理である。

VI. ロールプレイについて

1. ロールプレイの効果と課題

学生が教員役と生徒役になって、相談場面を演じてみる。たとえば、カンニングをした中学生に対する、呼び出し相談の場面を設定して、ロールプレイを行う。その後で、グループでロールプレイについて検討する。

先生役を経験した受講生のほとんどが、難しいという感じを抱く。生徒にあれこれと伝えたい、話したいということは浮かんでくるが、上手く言葉にならない。生徒に上手く伝えられない。生徒役からいろいろと質問されると、言葉に詰まってしまい、上手に答えられない。「カンニングはやってはいけないこと」とはっきりと言うことができない。生徒の心情に訴えかけるように、伝えることができない。会話をしながら、生徒の表情や仕草などの非言語的コミュニケーションにも気を配るのが難しい。

いろいろなことについて、日頃からよく考えていることが大切である。さまざまな反応をする生徒がいるので、ひとつの対応方法ではなく、多様な対応方法を身につけることも必要となる。また、日頃の生徒の様子をはっきりと認識していることも大事なことである。

明るく、楽しく日々を過ごすことがいいことであると考えられるようになって久しい。「生きるとは何か」といった永遠のテーマについて、授業で課題とし

教員の行う相談活動

て与えられない限り友人と話すことはまずない。また、友人の行動に疑問を感じても、その疑問を伝えることもない。個人の価値観であり、疑問を呈することはプライバシーを侵害することであり、自分の価値観を押しつけることである、という。見て見ぬ振りをする、そっとしておくことが、相手への思いやりであり、優しさであると考えている。その一方で、自分の価値観に不安があるのか、それを確認するかのように他の友人や教員の判断を聞いたりする。

日常において、このような対人関係が当たり前になっている人々にとって、たとえ相手が生徒であっても、その行動の非を指摘することはかなり勇気のいることなのであろう。生徒の気持ちを傷つけないように、生徒の感情を刺激しないように気をつけることが大切、という。その裏には、自分自身が傷つきたくない、気まずい雰囲気になりたくない、厳しい先生と思われたくない（生徒から嫌われたくない）という願望がある。生徒中心というより、自己中心的な考え方である。厳しい対応をとってもひびの入らないような、生徒と教員の対人関係を築いておくことが前提である、といった認識にまではなかなか到達しない。

2. ロールプレイを終えたあとの感想

遅刻が増えた生徒の事例、カンニングをした生徒の事例に関するロールプレイを終えたあとの、学生の感想を次にのせた。〈 〉内は筆者が加筆した。

- ・先生という立場で生徒に話しかけるのは思っていたより難しいと感じた。どこまで教師はふみこんでいいのか、例えば遅刻の事例の生徒は夏休みに何があったのかを聞いていいのかなどのさじ加減がわからなかった〈夏休み明けから、遅刻が目立つようになった〉。また、生徒に納得させながら注意するのは自分もダメな理由を認知する必要がある、かなり悩んだ。(3年、女子)
- ・生徒に理由を聞くことはできたが、その後の対処の仕方や生徒を納得させる

教員の行う相談活動

ような言葉を伝えるのは難しいと思った。自分がなぜしてはいけないのかをきちんとわかっていない部分があったので、なぜという所までつきつめた。 (4年, 女子)

- ・ 今日初めて行ったロールプレイで最も感じたことは難しいということでした。先生という立場から生徒に対して何が駄目であるのか良いのか、そして具体的な改善策、本音の部分で生徒の心を動かし改心させる様な指導を行うことが必要であることはとても難しいと思った。生徒とコミュニケーションを行う際にしっかりと先を考えて話したい。(3年, 男子)
- ・ 生徒の言葉にあいまいな返事しかすることができず、少し怒った口調になってしまった。初めての経験で、相談活動の難しさを感じ、加えて苦手意識を覚えた。改善すべき事を見つけ直していきたい。(3年, 男子)
- ・ 1番難しかったと思う点は、生徒にそれがダメだということをどう納得させるかでした。あいまいな答え方や不鮮明な答え方をしてしまい、適当な言葉を返すのがとても難しかった。「何のために登校時間が決まっているのか」「テストを受ける時のルールがあるのか」生徒に先に問いただしてみるのも良い方法ではないかと思いました。(そうすれば自ずとなぜダメなのか気づくと思う)(3年, 女子)
- ・ 友達の相談に乗ることは人生で何回かあったけれど対生徒という関係は初めてだったのでとても新鮮だった。私の中・高の時に経験した指導されるということはいかに先生によって考えられたものだったのかと思いました。人の気持ちに投げかけるということはとても難しいことだと感じました。(3年, 男子)
- ・ ロールプレイをやってみて感じたのが、まず自分が「なぜ、遅刻がいけないのか」ということに対する理解不足だった。しっかり理解しないと生徒を説得することは難しい。(3年, 男子)
- ・ 今日のロールプレイは、正直に言って難しかったです。理由としては、その

教員の行う相談活動

子の普段の目つき等を知らないから、本音で言っているのか否か区別できなかったです。これをふまえて考えると、相談活動に必要なのは観察力、洞察力なのかなと改めて思いました。(4年, 男子)

- ・生徒に寄り添わなくてはと意識しすぎて、どちらかという生徒に流れの主導権があった時が多かったようにふりかえて感じた。また、文章から生徒は消極的なタイプそうだったから相手もそういうイメージでやってくれたが、どこまで踏み込んでいいのか、聞きすぎると反対にやる気をそいでしまうのではないかと不安になった。寄り添うと生徒に合わせるは違うと思った。(3年, 男子)
- ・どんな答えが返ってくるかわからない状況で明確に生徒に伝えるのは難しいと感じた。必要以上に叱ることはできないし、甘やかすのも本人のためにならないと考えると、日頃どれくらい生徒と交流しているかが鍵になってくると思った。信頼があれば改善に向けて具体策を練ることもできるし、改善にもつながるだろうと感じた。(4年, 女子)
- ・生徒と教師役になってどのようにたいおうしたらよいか考えてロールプレイを行いました。少し難しいと思うことが多く、実際にやってみないと分からない課題があるんだと思いました。グループディスカッションするときには、自分では気づけなかった問題にも気づくことができ、新しい考えを得ることができました。(3年, 女子)

VII. おわりに

半期にわたる授業の最終回に、最も記憶に残った授業内容を学生にコメントしてもらおう。ロールプレイ、グロリアと3人のセラピストのビデオ、グループディスカッションに関するものが多い。体験したこと、具体的な場面の視聴に関するものである。講義の内容から、気がついたこと、考えたことに関するコ

教員の行う相談活動

メントはほんの数例あるだけである。ここから、具体的な内容、それも言葉によって表現されたものではなく、視覚的に表したもの、自分自身で行ったことを中心に学ぶ様子が見て取れる。次に、学生のコメンを記載した。〈 〉内は筆者が加筆した。

ロールプレイに関すること

- ・対面で話すと言うことが久しぶりだった。ここからもコミュニケーション不足の教師が多いということがうかがえると思う。(3年, 男子)
- ・実際にやってみると、思っていることはたくさんあるのに、伝えられないという難しさを体験できた。論理的に伝えるのも大切だが、できるだけその子の感情に注目してあげることが一番大切だと思った。(3年, 男子)

グロリアと3人のセラピストに関すること

- ・私は今まで共感しながら相談に乗ることが一番良い形だと思っていたが、最初にあった少し高圧的だが正論をぶつけ、自己開示させていた映像〈ゲシュタルト療法〉を見て、この方法も効果があるのだと感じた。(4年, 女子)
- ・色々な方法があることを知った。自分が一番良いと思った先生〈来談者中心療法〉はとても優しい人柄であったけれども、話しやすいからカタルシス効果を感じるだけであって、実際にその人が一番ではないかも…とあとから思いました。(3年, 女子LE)

その他

- ・特に印象に残っていることは「叱ってくれる人がいることに感謝しなければいけない」ということです。現在、あまり生徒や子どもを叱るということは良くないという雰囲気があるのですが、駄目なことは駄目と叱ることのできる教師になりたいと思いました。(3年, 女子)

教員の行う相談活動

- ・小学1年生ではどこまでできればいいかなど(あいさつ, 静かに30分先生の話聞くなど), 学年別でどこまで達成できればよいのか考えたことが記憶にとくに残っています。私は, その時のコメントにもかきましたが, 1時間集中して先生の話をするというは未だに達成できる時が少ないということでした。(3年, 女子)

相談活動を行うにあたって, 常に自分自身の生き方や在り方を問う姿勢が大切である。この姿勢なくして, 人生観や生きる指針を確立することは難しいと思われる。教員をめざす者が相談活動を担うためには, ひとりの大人, いち社会人としての礎を築くことが何よりも重要なことであろう。

参考文献

- 榎本博明 1998 カウンセリングマインド 榎本博明・飯野晴美・宮嶋秀光編 教育心理 生徒指導のキーワード 北樹出版 245-251
- 飯野晴美 2003 コミュニケーション能力について——教員に必要なものはなにか—— 明治学院論叢 697 教育学特集25 47-64
- 飯野晴美 2007 「マナー」をめぐる 明治学院大学教職課程論叢 人間の発達と教育3 53-68
- 飯野晴美 2011 対人関係について 明治学院大学教職課程論叢 人間の発達と教育7 61-77
- 飯野晴美 2014 コミュニケーション能力について2 明治学院大学教職課程論叢 人間の発達と教育10 41-56
- 國分康孝 1997 教師の使えるカウンセリング 金子書房
- 文部科学省 2010 生徒指導提要 教育図書
- 文部省 1990 学校における教育相談の考え方・進め方——中学校・高等学校編——
- Perls F. S. 1973 The Gestalt Approach & Eye Witness to Therapy Science and Behavior Inc. (倉戸ヨシヤ 監訳 1990 ゲシュタルト療法——その理論と実際—— ナカニシヤ出版)